

## シェーンベルク の作品

### 弦楽四重奏曲 ニ長調

4 楽章構成を備えた弦楽四重奏曲としては最初期のもので、完成は 1897 年、初演は翌 98 年に行なわれた（ただし、生前は未出版）。作曲にあたっては、シェーンベルクの親しい友人であり、師でもあり、のちには義理の兄弟となったツェムリンスキーの助言を得ている。後期ロマン派の甘美な旋律に、若きシェーンベルクが傾倒していたブラームスの影響が感じられる。

### 弦楽四重奏曲 第 3 番

調性放棄の第一歩を踏み出してから約 20 年、1927 年に「第 3 番」が作曲された。シェーンベルク 53 歳の年である。この頃にはすでに十二音技法が確立しており、無調の世界に新たな秩序がもたらされている。4 楽章構成で、主要となるセリー（音列）は第 1 楽章冒頭の 5 音、これが全楽章を貫くモチーフとなる。初演は義兄でもあるコーリッシュ率いるコーリッシュ弦楽四重奏団により、同年に行なわれた。

### 弦楽四重奏曲 第 1 番

1905 年に完成した「第 1 番」は、単一楽章でありながら、4 楽章制のソナタに含まれるすべての部分が 1 つの楽章に集約されており、主題が循環して巨大なソナタ形式を形づくる 40 分を超える大曲。まだ調性は保持されているが、1907 年のロゼー弦楽四重奏団による初演では、観客が激しい拒否反応を示し、新聞評も批判的であった。

### 弦楽四重奏曲 第 2 番

まるで「第 1 番」初演に対する手厳しい批評に真っ向から反論するかのようになり、1907 年 3 月から 1908 年 7 月にかけて作曲されたのが、この「第 2 番」。後期ロマン派的な作風から調性放棄へ向かう過渡期にあたり、古典的な 4 楽章制を保っているものの、後半の 2 つの楽章には、ドイツの象徴派詩人シュテファン・ゲオルゲの詩をもとにした歌が盛り込まれ、最終楽章に至ってはついに無調への扉が開かれる。

### 弦楽四重奏曲 第 4 番

「第 4 番」が作曲されたのは、シェーンベルクがナチス・ドイツを逃れてアメリカに渡ったのちの、1936 年のこと。新天地アメリカにおける作品には、ふたたび調性を有するものが見られるようになる。本曲も古典的な 4 楽章制を採っており、第 1 楽章はソナタ形式、第 2 楽章はメヌエット、第 3 楽章は緩徐楽章、第 4 楽章はロンド形式にもとづいている。第 1 楽章の主要主題は十二音技法で書かれているが、旋律の動きには調性が感じられる部分もある。

### プレスト ハ長調

作曲年は定かではないが、1895年前後。勤めていた銀行を辞し、音楽家を志して生計を立て始めた頃の作品。ロンド・ソナタ形式で書かれ、後期ロマン主義の影響のもとにあった若きシェーンベルクの楽想が瑞々しい。

### スケルツォ ヘ長調

もとは1897年に「弦楽四重奏曲 ニ長調」の第2楽章として書かれたが、ツェムリンスキーの助言を受けて差し替えられた。中間部トリオの旋律が軽妙な印象を残す。

### 《浄められた夜》

リヒャルト・デーメル同名詩をもとに1899年、弦楽六重奏曲として作曲。その後、作曲家自身により二度にわたって弦楽合奏用に編曲された。単一楽章からなり、30分近い演奏時間を要する。多用される半音階の斬新さや性的なモチーフが、1902年の初演時に物議を醸した。音楽は大きく5つのパートに分かれ、構成もデーメルの詩の展開に即して進む。つまりは原詩の情景描写や人物の情感を音で写しとった標題音楽であるが、そうした分けすら超越した名作であることは言うまでもない。